

都市空間の構想力

空間文化
の博物学

東京

第7回

東京大学都市デザイン研究室



目黒川の桜の並木が生み出す暖かな情景

時間の中の都市・容器としての都市 都市の動態をひとつの空間のなかで表現する

西村幸夫（東京大学教授）

都市の中の時間

時間の中の都市

ここまで本連載において私たちは都市の部分に着目し、そこに空間を構成してきた「都市の構想力」とでもいべきものを探ってきた。これは都市の中に凝縮された過去の時間を見いだす作業であったともいえる。たとえば囲碁の終局があるルー ルに基づいた土地囲い込みのひとつの結果を示しているとすると、一見白と黒の乱雑なまだら模様でしかないように見える碁盤の風景も、あるひとつの布石から始まっているのである。数多くの碁石に紛れてしまっ て最後には見えなくなってしまう順序盤中盤の布置の構想をもう一度読み直すとというのがこれまでの作業であった。

ただし、こうした作業の前提として、都市空間そのものが磁場を持った祝祭の舞台となるのだ。いやむしろ都市空間そのものが祭礼の具体的なプロットを規定してきたという側面もある。神社や寺院の配置は都市と周辺地形の中で選択されたものであるし、曳山の大きさは街路空間に収まる最大の大きさにまで膨張してきたことは想像に難くない。屋台の曳き揃えや転回、衝突、御輿の宮入りなどそれぞれの祭礼に特徴的なクライマックスの場には、辻や広場、食いや坂道など、それぞれの都市に固有の見せ場となる特徴のある都市空間が意図的に選ばれてきた。都市空間という器に沿って、祝祭のプロットそのものも育まれてきたのだから。

アクティビティの容器としての都市

このように祝祭の物語の容れ物として都市を見直すことによって都市の構想力の奥深さに対する理解がより一段と深まることになるが、このことは祭礼のみでなく、都市のアクティビティ一般にも当てはまる。本

て、都市がその過去を蓄積させてきているという都市を静態的に捉える見方があった。残り2回の連載では次のステップに進もうと思う。それは、都市に内在する変化への慣性力をあらわに示し、都市が事象や情景の中でそれらを受容する空間としてどのようなものであったかを明らかにすることである。そこから都市の動態的な構想力とその背後にある思想を新たに見いだしたいと思う。

季節と意図

時間と共に変化する都市のありようをもっとも分かりやすく示すものとして朝夕の変化と並んで四季の変化をあげることができる。一日のうちの短期的な変化は次号でとりあげるとして、ここではまず季節と都市との関係を見よう。その代表的な例として植物との関係がある。

桜の開花やキンモクセイの香りが、日常では気がつかなかった都市の潜在的な資源や可能性を気づかせてくれることは少なくない。季節の訪れを花によって気づかされることも多いだろう。たとえば彼岸花は東京都心部ではほとんど見ることはできなくなってきたが、かろうじて三宅坂あたりの皇居のお堀端の斜面に花を咲かせているのを見ることができ

として実際に行われてきたことを示す物証である。またそのような演出を効果的にもり立てるものとしてソメイヨシノのような賑やかで潔い品種が考案され、支持されてきた。これほど見慣れた桜がまだ百年余の歴史しかないということは、花見の名所を築きあげてきたまちづくりの意図がいかに急速に庶民の間に血肉化していったかを示しているともいえる。

祝祭の舞台として

時間の中の都市の落差を顕著に示す例として祝祭がある。日常の場から非日常の場への都市空間の使われ方の劇的な展開には誰もが魅了される。目立たないケの日々の中にハレの場へのエネルギーが蓄積されるのだ。

したがって祝祭の場に居合わせない限り、その都市を十全に理解したとはいえないことになる。祝祭とは日々蓄積されたエネルギー発露の場であり、そこにこそ固有の都市の物語が現出するからである。

そして宮や社だけでなく、街路や

号でも採り上げている駅をめぐる情景にも活動の容器としての都市の典型的な姿が浮かび上がる。駅を行き交う人々の中でふっと孤独を感じることがあるとするならば、それは自分自身が駅空間のなかで群衆のひとつとして制御の対象としか見なされていないと感じるからだろう。大勢のなかに埋没したとるにたらない無名の個に過ぎないと思えるからである。

ほんらい、都市の公共的な空間はこうした個々人をやさしく迎え入れ、ひとりひとりが人間としての尊厳を大切にされていると実感できるような場として構築されなければならぬ。たとえば街路に豊かな並木が求められ、公共空間に高い天井や典雅な階段が求められるのはそうした理由による。尊敬に値する都市はそれにふさわしい個を尊重する空間を積み上げていかなければならぬ。都市は活量をもったアトムの人なる集合体ではない。都市とは個の尊厳を大事にする民主主義の学校であり、都市空間はその思い出深い教室となるべきなのだ。

●時空を彩る桜が、都市の営みと広がりに関与する

春の一瞬、まちじゅうに華やきを添える桜の樹々は、都市づくりの文脈に巧みに取り込まれてきた。都市の営みを投影する桜の景によって、茫漠と広がる空間に季節が浮かび上がる。

図1 グリッド状の街区に散りばめられた桜 (北区西が丘)

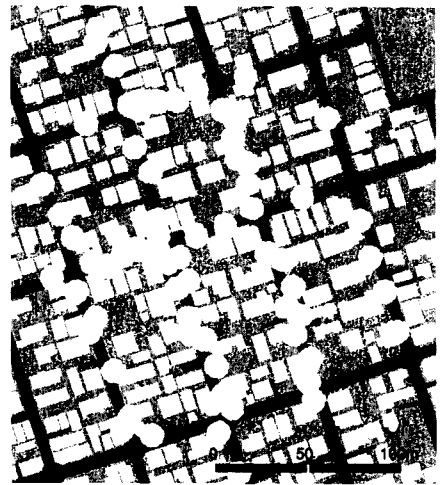


図2 住宅街の骨格軸に植えられた桜並木 (世田谷区上北沢)



図3/図4/図5 住宅街の桜並木 (左:上北沢/中:桜新町(深沢)/右:西が丘)

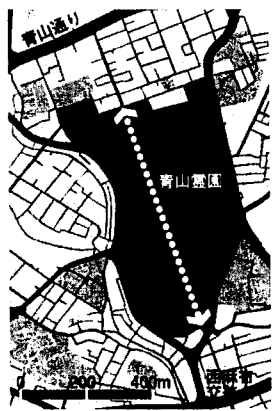


図6 青山霊園を貫く桜並木の軸線 (右図)
図7 谷中霊園を貫く桜のトンネル (下写真)

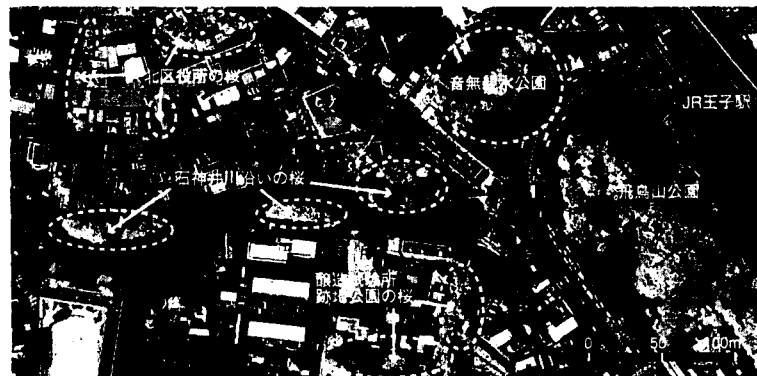


図8/図9 桜が生み出す界隈 (左図:千鳥ヶ淵周辺/右図:飛鳥山公園周辺 [Google Earth画像より作成])

●桜の植樹と都市づくり

3月。開花予想が騒がれ始め、やがて随所に桜が舞い込んでくる。東の間の桜花にまちが浮き立つのは、それだけ多くの場所に植えられた結果でもある。タウン誌等に取り上げられる都内の見所も、公園、庭園、社寺、霊園、河川、緑道、街路と、あらゆる屋外空間に及ぶ。

今日見られる桜の大半は、江戸末期から明治初期にかけて生み出され普及した、ソメイヨシノである。文化的志向もさることながら、生育が早く、開花時に一面を覆い尽くす品種は、景観創出の格好の素材となり、記念樹としても広まっていた。

東京では、明治初年、銀座煉瓦街の街路樹として松とともに桜が植えられたをはじめ、明治期に創り出された名所も数多い。帝都復興や戦災復興においても盛んに植樹された。また川沿いの桜並木は、蛇行し氾濫する河川の改修後に植えられた例が多く、河畔へ可住地を拡げた証にもなっている。都市づくりの節目を期すようにして、様々な場に桜樹が取り込まれてきたと言える。

●新天地を祝し、個性づける

都内23区で「桜」を冠する地名を挙げると、桜、桜丘、桜上水(以上世田谷区)、桜丘町(渋谷区)、桜川(板橋区)、桜台(練馬区)など、いずれも郊外の住宅地である。特に例の多い世田谷周辺では、大正期から昭和初期の耕地整理後に、好んで桜が植えられた。郊外の新天地に住まいを求めた人々は、桜によって新たな生活空間を祝福したのである。昭和初期に開かれた西が丘の住宅地(北区)では、グリッド状の街路の随所に桜樹が散りばめられている(図1、図5)。大正期に開発された新町住宅地(世田谷区)では、地区内を一巡する街路に植えられた桜がアイデンティティとなり、やがて「桜新町」と呼ばれるようになる(図4)。同時期の上北沢の住宅地(同区)では、各街区からの動線を集めて駅へと向かう骨格街路に、堂々たる桜のトンネルが出来上がる(図2、図3)。

日常生活の通り道に設けられた桜並木は、住民らが共有する春の風景体験に、鮮やかな存在感を放つ。

●聖域にハレの隧道を開く

時を限って咲き誇る桜の存在は、あらゆる場の属性を「名所」の名の下に打ち消し、多くの人々を誘い込む。その特徴的な例が霊園であろう。市街地の霊園は、様々な活動が錯綜する都市空間のヴォイドとして、普段はひっそりと佇む聖域であるが、春には一転し、桜観の場として多くの人出で賑わう。

霊園内を貫く通路に沿ったトンネル状の桜並木は、このような場を象徴するものとなっている。谷中霊園(台東区)では、元来の天王寺の参道が、日暮里駅からの動線となり、風格ある通り抜け空間として、多くの人々を呼び込む(図7)。青山霊園(港区)では、青山通りから西麻布へと園内を一直線に抜ける軸線沿いに桜が植えられ、人々は桜を辿って進んで行く(図6)。そこでは、桜のもたらすハレの空気が、領域の非日常性によって一層強められる。

大きな人の流れにより、桜花に覆われた霊園の軸線は、都市の聖域を象徴的に貫くという意味においても、(トンネル)の様相を呈する。

●華やきの界隈を表出する

晴れやかな雰囲気をもたらす桜は、連担することによって、広がりある空間に一体的な表情を添える。

皇居の千鳥ヶ淵(千代田区)周辺の桜は、明治期に英国公使によって大使館前に植えられた桜が発端となった。大正期の市区改正事業により、付近は桜樹を増し、千鳥ヶ淵公園として整備される。さらに戦後、現在の千鳥ヶ淵緑道と対岸(北の丸公園側)にも植樹が行われた。桜のまとまりが次第に付加され、靖国神社とも連担して、今日のような境界性を伴った名所が生まれた(図8)。

江戸以来の名所である飛鳥山公園(北区)周辺でも、その空気を波及させるかのように、音無親水公園、王子神社、石神井川沿い、醸造試験所跡地公園、北区役所などへ植樹され、桜の境界が表出する(図9)。

このような境界は、必ずしも核となる名所を必要としない。近所の公園や学校、団地の植込みなど、身近な桜が相補的な広がりを生み、麗らかな陽気の中で、人々を日常空間の散策へと誘う。

(永瀬節治)

●都市祝祭が街路空間を舞台へと転じさせる

都市祝祭の際に、街路は仮初めの舞台に転じる。そして、その舞台における装飾や人の動きが、普段は埋もれている都市の特徴を明示する。「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らな損々……」（阿波踊り「よしこのより」）

図1 日常目に止まらない空間であっても祝祭は舞台をつくる（浅草三社祭）



図3 蛇行した街路上に浮かぶ七夕飾り。視線が遮られ見通すことができない。



図2 神田祭大神輿渡御（平成18年度）。神輿が動くにつれて、舞台は1日中遷移し続ける。

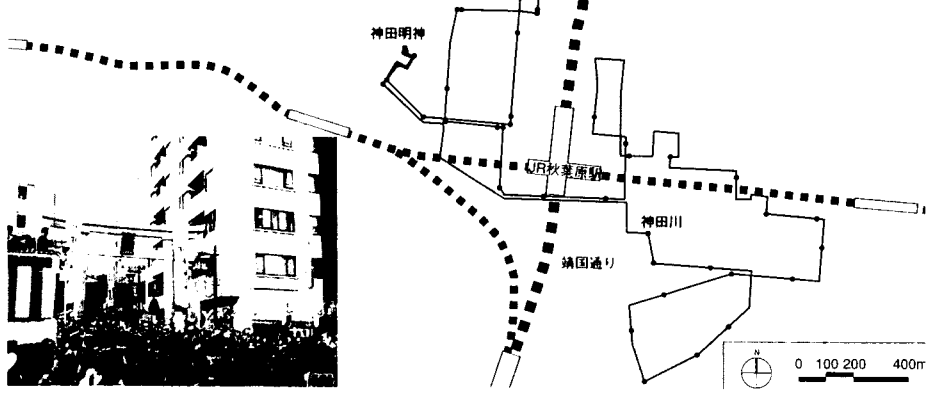


図4 様々な街路が異なった雰囲気のを提供する高円寺阿波おどり。

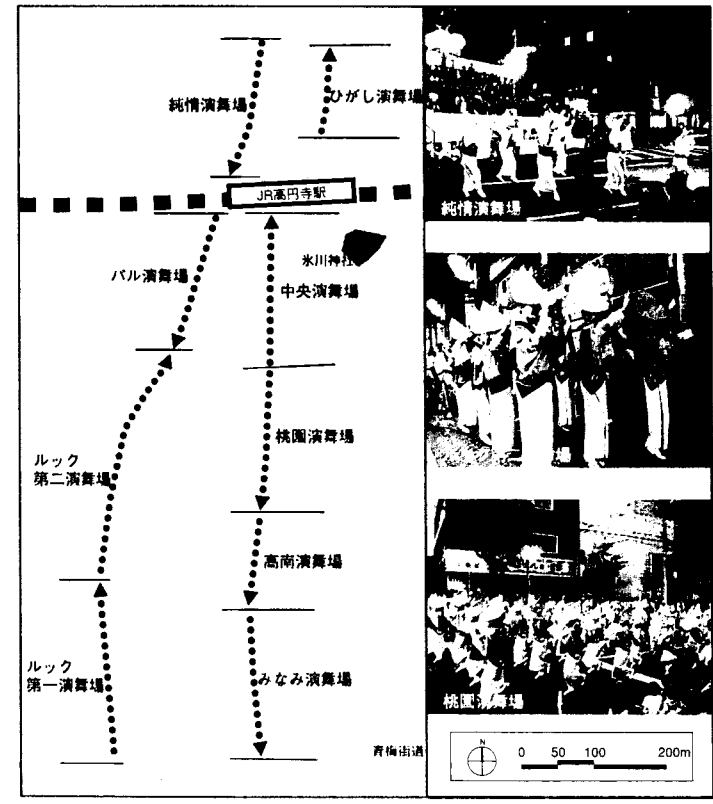


図5 商店街内部にある広場の空間。普段は単なる五叉路として認識されている。

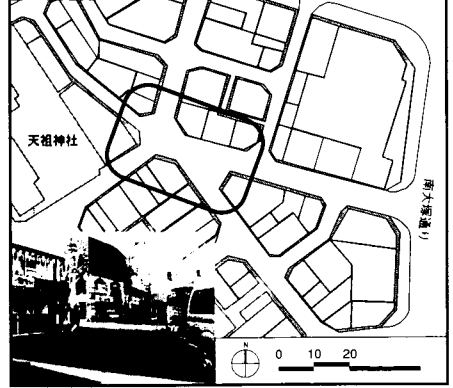


図6 五叉路を持つ広場としての可能性が、阿波踊りによって明確になる。



●都市内部に広がる伝統的祝祭

また1年と時間が経ち、祭りの季節が巡ってくる。この日ばかりは平時の都市の往来はすっかりと様変わりをして、祭りの舞台が都市内に設置される。設置されると言っても仮設的な舞台が設けられるとは限らない。都市の一部を舞台と見立てさえすればよいのだ。いつもの見慣れた街路であっても、祭りの演者たちが集えば、そこが立派な舞台となる。

伝統的都市祝祭である神田祭や浅草三社祭は、神社と地域の祭りである。神輿の出し方に多少の違いはあっても、いずれの祭りも氏子の居住域を神輿を担いで練り歩き、町内の各街路は、神輿の巡行路になることで、面的な広がりを持った舞台として立ち現れる。ここに都市の劇場的賑わいを我々は見出すことになる。

●祝祭への眼差しが都市を炙り出す

こうした伝統的な都市祝祭ではなく、新たに都市の祝祭的賑わいを演出することは可能であろうか。戦後東京には商店街振興を目的とした都市祝祭がいくつもある。これらは、時代や場

所に合わせて形が変化可能な祭りを借用し、それぞれの場所の特徴に祭りを適応させている。そして、商店街という独特の都市空間の中の賑わいを演出し、その都市の持つ可能性を炙り出している。

仙台の七夕を倣い昭和29年に始まった阿佐谷七夕まつりは、蛇行したアーケード街であるパールセンターの天蓋から様々な飾りが吊るされ、多くの見物客を集める祭りとなっている。商店街の店先では、普段と異なり祭り用の商品（ビールや食べ物など）が売られている。人々はこれらを物色しつつ、なかなか進まない雑踏の中から、先の見通せない蛇行した街路上に浮かぶ七夕飾りを点々と発見する。見物客は、天井の閉じたアーケードに籠もる祭りの熱気を視線の向うに感じながら、街路を巡って行く。この見上げの視線は、七夕飾りを眺める中で、一本の蛇行した街路形状の特徴を、より強調して人々に体験させる。

●多様な街路空間を舞台に変える

一つの祭りが一つの街の中の様々な街路を舞台に見立て展開することで、

各々の空間の特徴を強調することもある。昭和32年に始まった高円寺阿波おどり（杉並区）は、当初は駅の南口にある全長約250mのバル商店街だけが会場だったが、祭りの盛況と街の成長に合わせて演舞場が増えていった。2007年には、アーケード付き商店街、歩車共存の商店街、歩車分離の商店街、駅前広場、駅前の目抜き通りに設けられた合計9の演舞場で、70余の「連（踊りのグループ）」が同時多発的に踊りを披露している。

演舞場といっても、常に舞台と客席が設置されるのではない。舞台に見立てた一般道や商店街を、「連」が踊りながら練り歩く。広幅員の目抜き通りには棧敷席が設けられ、そこでの踊りは、様々な隊列を組み、大通りに相応しい壮大さを感じさせる。一方、幅員の狭い商店街で立見の観客の間を縫いながら披露される踊りは、観客と踊り手の一体感を感じさせる親密なものになっている。かくして、普段看過している都市空間の性格が、ハレの日に阿波踊りを通してより明確に浮かび上がるのである。

●祝祭が明示する都市空間の可能性

高円寺の成功を受けて、東京23区の商店街で同様に阿波踊りが開催されるようになった。その一つが、大塚阿波踊り（豊島区）である。大塚駅前広場を起点に緩やかにカーブを描く南大塚通りをメイン会場として開催される。この大通りの西側の街区に広がる商店街の隣に位置し、「ケ」の日には単に広々とした交差点として認識されている叉路がある。ここが、「ハレ」の日には、踊り手たちが楽しむために輪踊りをする「裏」会場となる。この場所をよく見ると、幹線道路から一本裏側の立地、五叉路の中心を眺めやすい西高東低の地形、視線の抜けない閉じた空間、大きめにとられた街区の隅切り、正面を叉路の中心に向けた商店の配置等、人々が集うための空間としての資質を備えていることがわかる。

このように、「ケ」の日に見逃している場の可能性を、「ハレ」の日の都市空間の使い方が鮮やかに描き出す。

（田中暁子・中島伸）

図6 JR駒込駅では電車を待つ人の視野にはつつじが広がる。

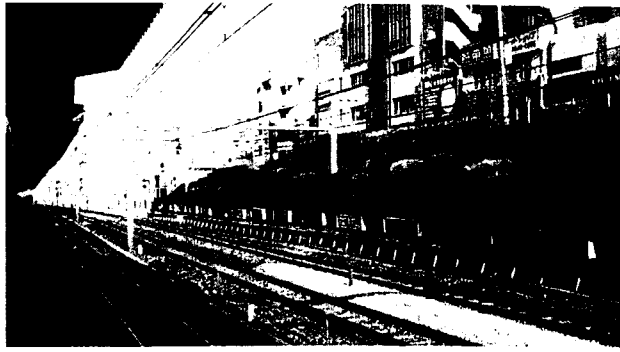


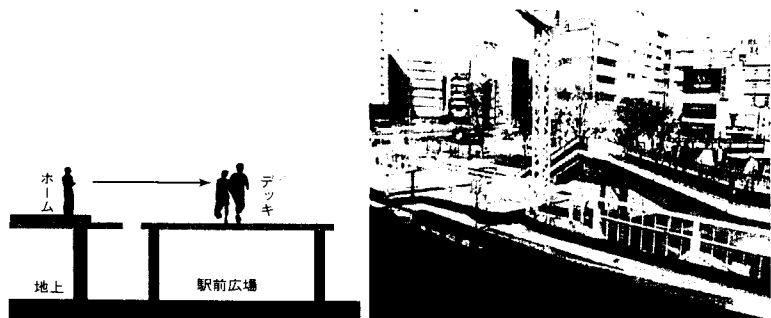
図7 東久留米駅に設置された富士見テラスから見える富士山（東久留米駅に展示されている写真）。



図4 JR大塚駅のホームから駅前広場を眺める。



図5 JR五反田駅では駅前広場のデッキがホームと同じ高さにくる。ホームで待つ人とデッキを行く人の距離は縮まるが、空間的には一線が画されたままである。



る。単に群集に埋没するのではない、このような大きな都市の情景を掴む場が積極的に確保されているまちに、魅力を感じるのである。

●視点場としてのホームの意義

駅前の情景は、高架ホームから眺めるのが良い。例えば山手線の大塚駅の高架ホームからは、移動する人々や電車が走行するさまが一望出来るし、五反田駅ホームからは、駅前広場への一際大きい視界の広がりの中に、ホームと同レベルにある歩道橋を人々が行き交うさまが現れる意外な風景が展開される。

これら駅前の情景が駅前のその場から眺める際とは異なる印象を受けるのは、高みから眺めているため全体が見渡せるという理由からだけではない。周辺のビルから群集を眺めているのは異なる感慨がある。それは駅前から改札を抜けて高架ホームから俯瞰するという一連の体験に情景が織り込まれているからであろう。高架ホームは、駅前市街地と一度関係を絶った上で、再度市街地に向けて開放されている。市街地と近接する地上のホームも良い

が、両空間が明確に隔てられた高架ホームだからこそ、群集から距離を置いて眺めることができる。そして、鉄道の非連続的な時間系が私たちにもたらす「ホームで待つ」という時間は、都市生活の中で、自分の意思以外で立ち止まる貴重な時間となり、群集の中には見えない情景に気づかせる。先ほどの駅前にいた自分の存在の余韻をその情景に見つける。

つまり、開放された高架ホームを視点場として捉え、駅は市街地とは異なる意味を帯びる。都市の中心たる駅が空間としてその周囲のまちと仕切られていることの現代的意義は、自省的な、しかし開かれた眼差しを伴う一種のアジール性にある。

実は別に高架である必要もない。眺める対象は、駒込駅ホーム前を彩るつつじや、御茶ノ水駅前に広がる外濠や聖橋のような心惹かれる美しい風景でよい。東京西郊に向かう鉄道沿線の駅から富士山を眺めるのは、最も贅沢な時間の使い方だろう。「えきなか」で想像、創造すべき情景は、「駅の市街化」だけではない。

(後藤健太郎・中島直人)

図2 渋谷の駅前の情景を群集の中において味わう。

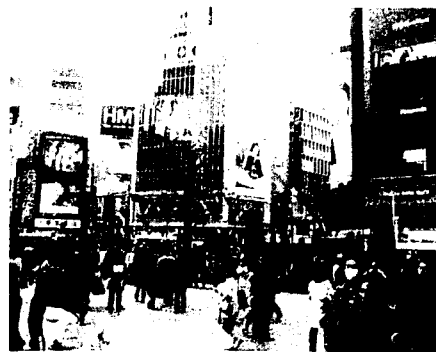
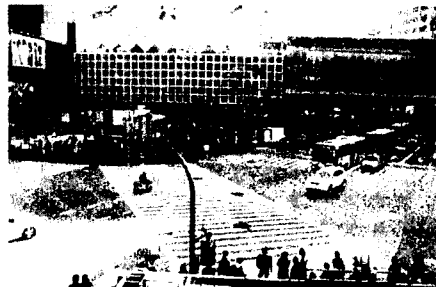


図1 駅が市街化している。ショッピングモールの情景と変わりがない。



図3 渋谷駅前スクランブル交差点での待つ・渡るの繰り返しのリズム。信号間隔に合わせて規則的に動くさまは、都市の鼓動と呼ぶに相応しい情景である。しかし、交差点で待つ人々はこの大きさに気づかないばかりか、ほとんどの人はビルの壁面に据え付けられた大画面に流される映像か携帯の画面に見入っていて、都市を見ていないのが現状である。



●駅ならではの情景を求めて

我が国の駅と駅前市街地との関係は曖昧である。地域のランドマークとなるような駅舎はまれであるし、駅舎を引き立てるような駅前広場を備えている例は少ない。駅ビルに代表される駅の商業空間化は近年では改札内にも及び「えきなか」が流行のキーワードとなっている。つまり、市街地と駅がシームレスにつながっている。こうした「駅の市街化」とも言うべき状態を日本的都市空間の一つとして積極的に評価することもできるだろう。しかしここではあえて、駅ならではの情景という観点から空間の構想力を逞しくしていきたい。駅や駅前には一般の商業空間や眼前の市街地とは異なる情景があり、それを大切にしたいと思うからだ。

都市における情景の主役が人の活動であるとすれば、人々が集う場所こそ情景の宝庫である。その点、駅は情景を生む場の代表格であった。駅の改札付近や構内で繰り広げられる出会いや別れの古典的な情景はもちろん、駅前で家族の迎えの車やバスを待つ人々が並ぶ姿、チャリを配る人と受け取る人々が交差する一瞬なども日常的に目に

する駅らしい情景であろう。ペDESTリアンデッキでストリートミュージシャンが演奏するさまざますっかり定番となっている。

●駅前に顕在化する都市の鼓動

特に駅前には駅構内以上に多くの人が多様な目的で集まるため、様々な情景が凝縮されている。中でも最も情景濃い駅前は渋谷駅のハチ公口だろう。駅構内とも市街地とも違う屋外の駅前広場と多叉路となっている駅前交差点が群集の多様な動きを混じらせる。駅前広場で滞留する人々、その中を掻き分けて、交差点前で立ち止まる人々。そして時間が進むと、一気に群集がスクランブル交差点を渡り始め、まちへ散らばっていく。

興味深いのは、群集の一人として体験する背丈からの情景が数多くあるというに留まらずに、渋谷の、都市の鼓動とも呼ぶべき大きな情景が生まれていることだろう。駅構内通路や周辺のビルから眺められる、群集が成す大移動や群集の粗密の移ろうさまは、多くの人が集う駅前であるからこそ顕在化する渋谷の鼓動であり、活気の形であ

●まちと一線を画した駅が都市の情景を大きく掴み取る

様々な人々が集う駅、そして駅前には情景が凝縮されている。その集合は都市の鼓動とも呼べる大きな情景をなす。改札を抜けた駅のホームから大きな情景を眺める自省的な眼差しの中に、駅がまちと一線を画してあることの意義が浮かび上がる。